

【学年】 4年 【教科・単元など】 道徳「わたしのせいじゃない」

【実践内容】

ねらい 現代社会の抱える問題は、無関心から起きていることが多く、自分のこととして考えて解決しようとする態度を養う。(生命尊重)

資料について

ア 資料名・出典 わたしのせいじゃない ーせきにんについてー (岩崎書店)
レイフ・クリスチャンソン文 にもんじ・まさあき訳 ディック・ステンペリ絵

イ 資料の概要

泣いて何も言わない一人の子どもの周りに、14人の子どもたちがいて、ひとり一言ずつ話をする。無関心な子や手を出した子、その子に問題があると言う子など、14人が言っていることは様々である。最終的には「わたしのせいじゃない」と全員が言う。本の中に「わたしのせいじゃない?」という問いかけの一文のあとに、戦争、公害、飢餓、原水爆実験の写真が載っている。その写真には説明は一切ない。

知的好奇心について

ここでは、「知的好奇心」を「問題意識」ととらえて考えた。道徳においても子どもたちの主体的な学びは重要だからだ。

子どもたちの問題意識はいじめられていると思われる子どもを誰もかばっていないという事実から生まれるだろう。普段の生活の中で、泣いている友だちがいたら必ず誰かがかばっていることから、このような状況に出会うことはほとんどないと予想される。「なぜこんなことに。」という疑問を子どもたちは持つことになる。

それから、本には出てこない15人目の一言を想像することで、無責任、無関心、勇気などについてふれることになり、その後の状況が変わっていくことに気づくだろう。

- ・導入...一人の子どもの提示し、印象を話し合う
- ・展開... 物語を読み聞かせ、14人の子どもたちの一言を提示していく。
話の部分を読み聞かせた後、感想を述べ合う。
15人目がいるとして、どんなことを言うのか想像して話し合う。
物語の最後には写真が載っていることを話し、自然破壊、公害などの写真を提示する。
- ・終末...自分の「わたしのせいじゃない」について考える。

子どもの様子・反省

今回は、本には出てこない15人目にその子が投影される。人としての弱さや、建前としての勇気、無関心や自己防衛、様々な言葉が出てきた。子どもたちの価値がぶつかり合い、議論となった。しかし、この議論に十分な時間をとることができなかつたため、価値のぶつかり合いとしては、浅いものになってしまった。この授業は、1時間ではなく2時間の設定で行うべきだった。

授業後、「みんながわたしのせいじゃないというから戦争とかが起きると思った。」と書いた子どもが一人だけいた。残りは「わたしのせいじゃないというから、いじめが起きる」というような内容が多く、中学年としては、この段階かなという気がする。しかし、子どもたちはこの本がかなり心に残ったらしく休み時間や読書タイムでは必ず誰かが読んでいる。巻末の写真の意味を子どもたちなりに考え、話に来る子どももいる。

道徳は、即効性だけを求めるのではなく、子どもの問題意識(知的好奇心)をもとにした授業を行うことで、徐々に道徳的な心情や態度が育つと考える。